



Title	バイリンガル/多言語環境の中での（共通語としての）英語（ELF）を媒介とした教育（MI/E）
Author(s)	村田, 久美子
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育（MHB）研究. 2020, 16, p. 1-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81822
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

≪招待論文≫

バイリンガル/多言語環境の中での (共通語としての)
英語 (ELF) を媒介とした教育 (MI/E)

村田 久美子 (早稲田大学)

murata@waseda.jp

**English Medium Instruction/Education in Bi-/Multilingual Settings
from an English as a Lingua Franca Perspective**

MURATA Kumiko

要 旨

本論文ではグローバル化進行の中、日本でも特に過去 10 年ほど奨励され実施されることが多くなった英語を媒介とする授業・教育 (English-Medium Instruction/Education - EMI/E) に焦点を当て、EMI と共によく語られる CLIL (Content and Language Integrated Learning) との関係にも触れつつ、EMI に関する論点を論じる。特に、一見相対立する EMI とバイリンガル/多言語主義の関係を明らかにしつつ、EMI 実施上切り離せない「共通語としての英語」(English as a Lingua Franca - ELF) の概念を導入する。グローバル化の中で導入された EMI は、多言語環境内で実施され、EMI の E (「英語」) は ELF であるが、この現実と実際の言語政策、教育現場レベルの間にはしばしば乖離がある。この点を著者や同僚による研究、言語政策文書等のデータで説明しつつ、多言語背景の英語使用者がいかに多様な言語資源を用いて、効果的にコミュニケーションを図るかを紹介、EMI の効果的实施が、母語・継承語・バイリンガル(多言語)教育の理解及びトランス・ランゲージング(translanguaging)の現象とも相容れることを指摘する。

Abstract

English-Medium Instruction/Education (EMI/E) has been promoted worldwide due to the acceleration of globalisation. This paper discusses various issues closely connected to the implementation of EMI, including CLIL (Content and Language Integrated Learning). In addition, by introducing the notion of ELF (English as a Lingua

Franca) , which, by definition, is often practiced in multilingual settings, it also confirms the close relation between EMI and bi-/multilingualism despite their being often discussed in conflicting terms. In this context, the E of EMI should naturally be understood as that of ELF. This might sound a matter of fact, however, in reality there is often a great gap between the actual use of ELF and language policy and practice in education. The paper highlights the gap by presenting data from the research by the author and her colleagues and confirms and reiterates that the full understanding and awareness of ELF use is essential for the effective implementation of EMI, which simultaneously leads to understanding of the role of mother tongue, heritage language and bi-/multilingual education as well as the practice of translanguaging.

キーワード : EMI, ELF, CLIL, 多言語主義、多言語資源の活用

1. EMI (英語を媒介とする授業・教育 - English-Medium Instruction/ Education - EMI/E) とは

この論文ではグローバル化の進行とともに、日本の教育現場でも多く取り入れられるようになった英語を媒介とする授業 (EMI/E - English-Medium Instruction/ Education¹⁾) に焦点を当て、これを特に共通語として使われる英語 (ELF-English as a Lingua Franca) の視点から論じる。この二者は双方とも近年の急速なグローバル化に伴う現象であるが、二者を関連付けて言語政策、教育を論じることは日本では今までにほとんどなく、その点で、意義深い。また、「母語・継承語・バイリンガル教育」の視点からは、上記二者はその視点・価値観を脅かすものと解釈されがちである (Phillipson, 1992; Skutnabb-Kangas, 2001)。本論文は、ELF の視点を取り入れた EMI は決してこの「母語・継承語・バイリンガル教育」の理念、価値観を脅かすものではなく、逆にこの考え方を内包するものであることも明らかにする。本論文では、まず、以下第1節の各項では、背景、EMI 定義、EMI と CLIL (内容言語統一型教育) の相違、第2節では ELF 定義と ELF への誤解、ELF 使用の現実と政策との乖離を、第3節では EMI、ELF と多言語教育の関係を、最後の第4節では英語 (目標言語) を媒介とした授業と母語・継承語・バイリンガル (多言語) 教育の将来を論じる。

1.1 背景

教育現場における最近の EMI の急速な採用と普及はグローバル化の進行と切り離しては語れない。特に経済のグローバル化は、産業界にグローバル人材育成の必要性を強く認識させるに至り、これは特に経済界が政府に高等教育でのグローバル人材養成の必要性を提示するきっかけとなった(官邸, 2012)。これを受け、高等教育の国際化の必要性、その一環としての留学生の増加、学生、教職員の流動性の確保とこれを実現する具体的施策の一つとして、英語を媒介とする授業(English-Medium Instruction – EMI)の奨励へと至った(MEXT, 2011, 2014)。

グローバル化に伴う EMI の促進は一步先んじて EU 域内の学生、教職員の流動性の確保を目的とした ERASMUS プロジェクト及びボローニャ宣言(the Bologna declaration)(Björkman, 2016; Coleman, 2006; Cots, Llorca & Garrett, 2014; Doiz, Lasagabaster & Sierra, 2013; Jenkins, 2014; Kuteeva, 2019; Ljosland, 2011; Mauranen, 2012; Seidlhofer, 2010; Smit, 2010, 2019; Smit & Dafouz, 2012 等参照)を通し、1980 年代後半より EU 諸国で推進されている。

また、英米の植民地下で EMI を経験したアジア諸国(Gill, 2005; Azirah Hasim, 2009; Kirkpatrick, 2012; Lim, 2009; Low & Pakir, 2018 等参照)も新たにグローバル化の中で独自の EMI 政策を推進している。同じく、中国、韓国等の東アジア各地でもグローバル化進行の中で、1990 年代の後半より、EMI を広く導入(Cheng, 2012; Cho, 2012; Hu, 2009; Hu & McKay, 2012; Park, 2009, 2019; Piller & Cho, 2013; Wang, 2019 等参照)、日本でもこれを追う形で、特に過去 10 年ほどで急速に奨励され(MEXT, 2011, 2014; Murata, 2019a)、実施数が増加している。

1.2 EMI の定義

では一体 EMI(英語を媒介とする授業)とは何か。これは、名前が示す通り、ある意味では極めて明白である。ブリティッシュ・カウンシルの委託を受けて EMI の大規模調査を実施した Dearden (2014) による定義は「大多数の人々の第一言語が英語でない国等で専門科目を教えるのに英語を使用すること」(pp. 2 & 4, 村田訳)である。しかしこれはグローバル化の中で増え続けている EMI の状況を正確に捉えたものとは言い難い。例えば、大半の日本の専門科目の授業に見られるように、教員と学生が第一言語を共有することが多い状況、または英語圏の大学、特に大学院における近年学生の大半を留学生が占める状況での英語による専門教育は EMI の定義には含まないのか(Jenkins, 2014, 2019 等参照)。あるいは、ヨーロッ

パの大学では英語学、英文学関連学科の授業は英語で行うことが当然のため EMI の研究対象から外されているが (Smit, 2016)、日本のように英語英文学科でも専門科目は日本語で教えることが一般的な状況 (例えば Harada, 2017 参照) での、英語を媒介とした授業は EMI に含まないのか、等の多くの問題を考慮していない。そこで、Murata and Iino (2018) では上記の点を考慮した以下の、広義の EMI の定義を導入している。

言語文化背景の異なる学生、教員間で専門科目を学び / 教えるために
英語を共通語として使用する授業 --- 及び学生、教員が言語文化背景
をほぼ共有する場合や英語関連の学科で英語を使用し教え、学ぶ場
合も含む²⁾ (Murata & Iino, 2018, p.404, 村田訳)

この定義は日本のような、多くの場合学生間、学生と教員間で言語背景を共有しながら専門科目を英語で学ぶ状況、また、英語圏の、留学生が多い大学、大学院等での英語で行われる専門科目の授業も含むことになる。ただ前者の状況では、しばしば EMI の目的の一つが専門科目の学習・教授の他に、英語力増強であることも多く、あるいは少なくとも学習者側ではそのように考えている場合も多く (村田他, 2017, 2018 参照)、その意味で、専門科目を目標言語で学びながら、目標言語自体の学習も目指す CLIL との区別が難しくなる。以下にこの点を論ずる。

1.3 EMI と CLIL (Content and Language Integrated Learning)

EMI と共によく語られる内容言語統合型学習 (CLIL) は内容と言語を同時に学ぶ二重の目的を有し (Coleman, 2006: 4-5; Coyle, Hood, & Marsh, 2010:41-45; Smit & Dafouz, 2012: 4 等参照)、言語については英語に限らず多様な言語学習を含む点で EMI と大きく異なる。CLIL は EU の複言語政策を背景に生まれた言語学習 / 教授法で、基本的には 1970、1980 年代に盛んに論じられた Content-Based Language Teaching (CBLT) あるいは CBI (Content-Based Instruction) 等に源を発すると言える (Widdowson, 1978 など参照のこと)。このように、CLIL は EMI と異なり、言語学習が目的の一つとして明確に提示されているが、‘CLIL’ の 1 つ目の L、つまり媒介言語が英語の場合は、両者は時としてほぼ同じ意味で使用されることも多い (Smit & Dafouz, 2012: 4, Murata, 2019a も参照のこと)。実際、Smit, Dafouz 等は同じ状況で CLIL と EMI 双方の視点から研究を進めて双方に跨る出版物も多

く、両者を明確に区別することの難しさも述べている (Smit & Dafouz, 2012: 4; Dafouz & Smit, 2016 も参照のこと)。

一方、CLIL と EMI の共通点は両者とも多言語文脈で使用される点である。Bolton and Kuteeva (2012) は、この文脈では

正式には英語を媒介とするコースでも教員、学生による地域言語の
ある程度の使用 (parallel language use) がよく観察される。

(Bolton & Kuteeva, 2012: 439、村田訳)

と述べている。つまり、英語を媒介とする授業コンテキストは多言語コミュニケーションである場合が多いと報告されている (Ljosland, 2011 も参照のこと)。これは筆者等の研究でも明らかになっている (Murata, forthcoming; Murata & Iino, 2018, Murata, Iino, & Konakahara, 2019 参照)。これらの結果から判断すると、EMI の導入は、よく危惧される多言語主義への脅威に繋がるものではなく、多言語と共存している状況と解釈する方が正しい。次項ではこの点に関し、もう少し詳しく論じる。

1.4 EMI—多言語主義への脅威？

本項では、EMI とバイリンガル/多言語主義の関係をより詳細に論じる。EMI はしばしば 1990 年代によく論じられた言語帝国主義 (Phillipson, 1992; Skutnabb-Kangas, 2001; 津田, 1990 等参照) の流れから、他の言語使用を排除し、多言語主義とは一見相対立し、英語使用のみの促進による学習者の母語、継承語の軽視、消滅の危機に繋がるとされ、特に多言語主義の立場から警鐘を鳴らされることが多い。また、英語が他の少数言語の消滅を助長する言語 (a killer language) と捉えられる (Phillipson, 1992; Skutnabb-Kangas, 2001) のは、1980、90 年代に国際語としての英語の普及 (Crystal, 1997, 2003; Graddol, 1997, 2006 等) が広く語られた点も大きい。この英語普及のディスコースが各国で英語教育強化の言語政策の根拠として利用された点も否めない。日本語の公的文書等 (MEXT, 2011 等参照) でも「国際共通語としての英語力向上」が明確に謳われ、また、ここで言う英語教育は母語話者基準に基づいた外国語としての英語の強化であることも明らかである (MEXT, 2011)。このような英語教育促進の現状では、確かに多言語主義の立場からは英語至上主義による、継承語等の少数言語軽視、及びその消滅の可能性への危機に繋がると捉えられる可能性があることも否めない³⁾。しかし、ここで語られる「英語」や EMI

の E、つまり英語が、グローバル化の中、母語話者の英語ではなく、真の意味での共通語としての英語、つまり、ELF であると捉え直すと、EMI はバイリンガル/多言語主義とも相通じる。次節では何故 ELF 的視点の導入が多言語主義に繋がるかをもう少し詳細に論じる。

2. ELF「共通語としての英語」(English as a Lingua Franca - ELF)

本節では EMI 実施上切り離せない「共通語としての英語」(ELF) の概念を、その定義 (2.1)、誤解 (2.2)、及び ELF 使用の現実と言語政策、教育現場レベルとの乖離 (2.3) の 3 点から明らかにする。

2.1 ELF 定義

ELF の定義はこの分野の研究が進み、ELF インタラクションの実態が解明されるにつれ、少しずつ変化している。現在の段階で多くの ELF 研究者に共通する理解は「ELF は多様な言語文化背景の人々がいろいろなコミュニケーションの文脈で、参加者に (しばしば唯一の) 共通のコミュニケーション手段として使用される」(Murata, 2019a, 2019b; Seidlhofer, 2011, 2018; Widdowson, 2013, 2019 等参照) という点である。近年、多言語主義への流れの中で、一部の ELF 研究者間で、もっと明確に ELF を多言語主義の枠組みの中で捉えるべきであるという声もあるが (例えば、Jenkins, 2015)、ELF が多言語環境の中で使用される点は ELF 研究初期から想定されており、だからこそ ELF の使用が必要なのであり、定義にはこれが織り込み済みであるという理解が一般的である (例えば、Hülmbauer & Seidlhofer, 2013 参照)。但し、先に述べたように、ELF 研究が進み、ELF インタラクションの実態が解明されるにつれ、詳細において初期の ELF の定義は少しずつ変化しており、このため、他分野の研究者 (例えば第二語習得論 (SLA)、音声学、世界の英語 (WE) など) が現在に至っても初期の ELF 研究論文 (特に 2000 年代前半) のみを参照にし、議論を進めることにより、誤解に基づいた議論が展開されるケースがよくあり、次項ではこの問題を論じる。

2.2 ELF への誤解

本項では、ELF に関する誤解を、多言語主義との関係 (2.2.1)、世界の英語 (WE - World Englishes) パラダイムとの違い (2.2.2)、母語話者との関係 (2.2.3) の 3

点に注目し、論じる。

2.2.1 ELF 使用はバイリンガル / 多言語主義への脅威？

既に、この問題に関しては EMI との関係で 1.4 でも言及したが、特に多言語主義の立場から、EMI 等による英語の促進は英語以外のその他の言語に対する脅威であるという根強い誤解がある。1.4 では、EMI を ELF の視点から捉えると脅威ではないことを論じた。ここでは、上記 2.1 の ELF の定義と関連付け、ELF 自体が多言語環境の中で使用される事実を再確認することにより、上記の誤解が杞憂であることを論じる。つまり、多言語主義でよく捉えられるような「英語対その他の言語」の構図ではなく、ELF 的な考え方で捉える英語は多言語主義を決して否定、あるいは排除するものではなく、他言語と共存して使用されるという事実である⁴⁾。これは下記、3.3 でも論じるように、ELF インタラクションの研究成果では ELF 使用者はトランス・ランゲージングを始め、あらゆる言語、非言語資源、及び方略を有効に活用し、コミュニケーションを行っていることが報告されているからであり(例えば、Cogo, 2012, 2016, 2018; House, 2003; Mauranen, 2006, 2012 を参照のこと)、ELF 的視点を取り入れた EMI では、英語でのコミュニケーション中に、地域言語あるいは参加者の間である程度共有されている第三言語が使用されたりすることも報告されており (House, 2016; Smit, 2010, 2019)、英語以外の他言語使用を制限するものでもなく、英語はあくまでも参加者間の一つの共通のコミュニケーション手段として使われ、コミュニケーションを円滑に進めるためには、他に有効な言語、非言語資源があれば、その資源の自由な活用は否定されず、却って奨励されていると言える。そのため、地域言語やその他の言語資源は、ELF 的視点を取り入れた EMI では、英語と共に共存している (Bolton & Kuteeva, 2012; Ljosland, 2011; Smit, 2010, 2018 等参照)。つまり、1.4 でも指摘したように、ELF コミュニケーションは多言語下でのコミュニケーションなのであり、他言語の存在を脅かすものではなく、多言語の中で存在している。ELF 使用者はあらゆる言語文化背景を有し、そのインタラクション毎に、また相手毎にコミュニケーションの方略も変化し、近年の研究では特にその流動性、ダイナミズムが語られることが多い (Cogo, 2016, 2018)。この点が、次に挙げる誤解、つまり ELF は英語の変種 (variety) ではないかという捉え方とも反する。以下、この点について更に議論を深める。

2.2.2 ELF 研究は variety (変種) の確立が目的？

2.1 の定義でも述べたが、ELF は比較的新しい研究分野であるために、研究の進展と共に、その定義自体も少しずつ変化している。現在の ELF 研究の初期の頃、つまり、2000 年代最初の 10 年（2000 ～ 2010）前半には、ELF も研究が進むにつれ、音声や、文法、語彙等である種の共通の特徴が現れる可能性があるのではと考えられた時期もあった。そのため、ELF 研究のごく初期には、この可能性をある程度窺わせる論文もある（Jenkins, 2000; Seidlhofer, 2004 等参照）。しかし、研究が進むにつれ、ELF は特種な地域に根ざした特定の特徴を持つものではなく、より流動的で柔軟性のあるものだという考えが一般的になり、2000 年代最初の 10 年（2000 ～ 2010）後半には研究者間では ELF は WE で研究されているような地域コミュニティに根ざした変種（variety）ではないことが既に指摘され始めた（Jenkins, 2017; Seidlhofer, 2011; Widdowson, 2015 等参照）。つまり ELF コミュニケーションは多様な言語背景を持つ参加者間で行われ、その参加者もコンテキスト毎に変わり、同じ地域、コミュニティ内というより、それを越えた、また時空的にも 1 回限りや数回をみのインタラクション、Pitzl (2018) が言うところの TIG (Transient International Group) の状況で異なる言語文化背景の相手とコミュニケーションを取ることが多い。ELF 研究の重心は、そのようなインタラクションの中で参加者がいかに誤解を防ぎ、お互いに成功裏にコミュニケーションを図っているか、また目的を達成するためにどのような意味交渉をし、コミュニケーションを成り立たせているか、ということの解明に移っている。この点においては、同じコミュニティ内で繰り返し用いられて発展を遂げ、そのため独自の特徴を擁し、その地域に根ざした変種として認識される世界の英語（WE）とその特徴を明らかにすることを目的とする WE の研究とは異なる。この点に関し、Widdowson (2015) の、WE のパラダイムが言語とコミュニティ（language and community）との関係を研究するのに対し、ELF は語用論的变化（pragmatic variation）に注目し、言語とコミュニケーション（language and communication）を研究する学問分野であるという考察は、言い得て妙である（Jenkins, 2017; Seidlhofer, 2009 も参照のこと）。3 つ目の誤解の傾向は、ELF 話者の範疇に英語の母語話者が含まれるかどうかの問題であり、以下に詳しく論じる。

2.2.3 ELF コミュニケーションの定義には英語母語話者は入らない？

共通語として英語を使用する人々は世界的に見ても圧倒的に英語非母語話者が

多い (Crystal, 2003; Graddol, 2006 等参照)。よって初期の ELF 研究者には、例えば、Firth (1996) や House (2003) に代表されるように、ELF コミュニケーションには英語母語話者は含まれないとする論文があるが、少なくとも過去 15 年ほどは ELF 研究者の間では、ELF コミュニケーションには母語話者も含むという理解が共有されている (Jenkins, 2007; Widdowson, 2013 等参照)。ただ、インタラクションで母語話者が大半を占める場合、その基準に基づいたインタラクション展開の可能性があり、両者の比率にはある程度の考慮が必要だとされている (Seidlhofer, 2011)。要は、母語話者が含まれようが含まれまいが、言語文化背景の異なる参加者の中で英語が唯一の共通語であるような状況で使われる英語が ELF であり、この参加者の中に母語話者が含まれているかいないかは ELF 定義には直接関係がない。このような状況では、参加者間でどのようにコミュニケーション内容が交渉され、理解に至っているかが重要な要素であり、既存の英語母語話者を基準とした英語教育政策、及び英語教育のパラダイムは共通語としての英語の実際の使用状況とは乖離がある。次項ではこの問題を論じる。

2.3 ELF 使用の現実と言語政策、教育現場レベルとの乖離

本項では、これまでの議論を踏まえ、ELF 使用の現実と言語政策、教育現場レベルとの乖離を取り上げる。これにあたり、先にも既に簡単に触れたが、ここでは主として、「共通語としての英語」という表現の、異なる解釈を 1) 公的文書等と ELF 研究で使用されている ELF の意味、2) ELF 使用の現実と言語政策、教育の現場レベルとの乖離の 2 点に絞って論じる。

まず、1) の公的文書等で使用されている「共通語としての英語」と ELF 研究で使用されている同表現の意味の違いを論じる。上記 1.4 でも言及したが、公的文書で謳われ、促進されている「国際共通語としての英語」への言及には、ほとんどと言っていいほど同じ文書内に、以下の例で見られるように「英語母語話者」への言及がある。

(例) 文科省による「国際共通語としての英語力向上のための 5 つの提言と具体的施策」の中、「提言 3. ALT、ICT 等の効果的な活用を通じて生徒が英語を使う機会を増やす。」の説明の中、5 段落目に以下の説明がある。

——。さらに、英語教員が授業においてデジタル教科書・教材を活用して、ネイティブ・スピーカーが実際に発話している場面や、発話の際の表情やジェスチャーなどの画像・動画等を提示することにより、生徒にわかりやすい授業を提供できるとともに、授業の効率を高めることができる。

(MEXT, 2011, 強調、筆者)

これは「国際共通語としての英語力向上」のための提言の一つとして挙げられたもので、ネイティブ・スピーカー、つまり英語の母語話者と「国際共通語としての英語」がはっきりと結び付けられている。ELF の研究者たちがグローバル化の中で使用されているとする英語の実態、つまり ELF コミュニケーションの現実とは明らかに異なることが明白である。

以上の例は政府等の言語政策が、多様な言語文化背景の英語使用者の共通語としての英語使用状況の現状を把握せず、この用語をただ表面的に使用している実態を表している。つまり、グローバル化の深化を理由に英語力増強を促進しているにも拘わらず、このような状況下で英語が実際に共通語としてどのように使用されているか、従ってこの現実を反映した言語政策・言語教育はどのようなものであるべきかの実態を調査、解明し、その実態を理解、把握した上での政策提案とは言い難い。ELF 使用者は多様な言語文化背景の人々と、あらゆる言語及び非言語資源を用い、効果的且つ柔軟にコミュニケーションを図っており、これを認識した教育政策、カリキュラム等が必要となる。次節では、この ELF 的視点を EMI の中に組み込むことで、どのように母語・継承語・バイリンガル（多言語）教育・主義とも関係してくるかを論じる。

3. EMI、ELF 及び多言語主義

3.1 EMI の ‘E’

前節でも述べたが、グローバル化進行の中で広く導入されている EMI は多言語環境の中で実施されることが多く、また第 1 節で述べた EMI の定義から考えても EMI の E（英語）が ELF を想定して実施されるべきことは明白である。しかし、言語政策立案者、教育実践者、学習者自身も、これに気づいていることが少なく、EMI を語る際に、E はどのような英語を想定しているかの議論はほとんどなく、あ

くまでもアメリカ英語、イギリス英語等の英語母語話者基準のEが当然のように前提となっている。このために筆者等の研究では、EMI受講の日本人学生に、従来の欧米の母語話者基準に深く影響を受け、拘束され、この基準を前提としてEMI授業への積極的参加の困難さ、躊躇等を述べる意見も観察された(Iino & Murata, 2016; Murata & Iino, 2018 等参照)。以下、筆者と研究同僚が実施したEMIに関するインタビューデータから、この傾向が観察できる参加者の意見を1例提示する。

例：母語話者基準に囚われた積極的授業参加の困難さの例

以前はX*にいてもネイティブの基準に囚われていた。ネイティブや帰国生と比べると話すのが恥ずかしかった。間違っ**て**はいけ**ない**としゃべるのが恥ずかしいこともあった(2-4F9) (*EMI プログラム名)
(Iino & Murata, 2016, p. 122 も参照のこと)。

上記の意見は、回答者が英語母語話者基準に囚われ、これに基づいた英語でのコミュニケーションに困難さを感じていることを示している。一方、上記のようなコミュニケーションが真にELF環境で行われ、参加者が他のコミュニケーション手段を共有していない場合は、共通語としての英語に頼らざるを得ず、使用者にもELF使用へのある種の覚悟や意気込みが観察された(Iino & Murata, 2016)。また、日本のEMIコンテキストによくあるように、教授者、学習者双方、あるいはその大半が母語を共有しているような状況では、あらゆる資源を活用するELF的コミュニケーションの視点を取り入れると、EMI参加者間での一部母語活用の可能性も考えられる。以下にこの点を詳しく論じる。

3.2 (E) MIでの母語の役割 / 使用

EMI授業での地域言語の使用に関しては、既に1.3でも論じた(Bolton & Kuteeva, 2012; Ljosland, 2011; Murata, forthcoming; Murata & Iino, 2018; Murata, Iino, & Konakahara, 2019 参照)。ELFに限らずEFL(English as a Foreign Language—外国語としての英語の授業)での母語使用に関しても、今までにも、特にコミュニケーション型言語教授法(CLT—Communicative Language Teaching)との関連で広く議論されている。CLTの名のもとに目標言語以外の言語使用を禁ずる政策には反論も多く、これは授業での翻訳使用の有効性との議論とも相まって、頻繁に論じられて

いる (Cook, 2010; House, 2009; Widdowson, 2003 等参照)。また、この議論は従来の言語習得 / 学習における母語使用是非の議論とも深く関係しており、目標言語の母語話者並みの言語能力習得を目指し、学習者になるべく多くの目標言語に触れさせることを推進する議論の中でも論じられている。例えば、Lyster (2018) は、上述の CLIL と深く関係している CBLT では、学習者の英語に触れる時間を最適にするために、「L1 使用を回避する」(‘CBLT programs strive to circumvent the use of the students’ L1.’) (p.26) と明確に述べている⁵⁾。更にここで言及されている英語は言うまでもなく母語話者の英語である。このような状況下では学習者の母語使用は学習の失敗を示すと判断されがちである。Dafouz, Hüttner and Smit (2016) はこの件に関し、特に、あまり「国際色が豊かではないコンテキストでは共通の L1 や英語以外のどの言語を使っても失敗」(p.136) とみなされる傾向があり、一方、「多文化多言語の伝統が豊かな状況」ではそのようなことがないと指摘している (Dafouz et al., 2016, p.134)。後者の例としては例えば、ELF 環境下での L1 使用が話者間の仲間意識の表出、協調として前向きに捉えられることが挙げられる。

またこの議論は CLT の本質とも深く関連しており、ひいてはコミュニケーション能力 (communicative competence) をどのように捉えるかということとも深く関わる問題である。CLT では学習者の母語をなるべく使わないのを良しとする傾向があることに関し、Widdowson は、CLT の、ひいては、その基となるコミュニケーション能力の間違った解釈 / 理解によるものであると指摘している (Widdowson, 2003, 2008; 村田・原田, 2008 等参照)。実際、筆者等の研究データの中にも、EMI 授業中で、参加者全員が程度の差こそあれ、第二の共通語として日本語 (JLF – Japanese as a Lingua Franca) を有している場合は、これを有効に活用し、コミュニケーションを効果的に行ったり、仲間意識の提示・増強をしていることが観察された (3.3 参照)。また、グループ活動等で、グループ内で参加者の L1 が共通する場合は、その共通言語が使用されている事実も報告された。以下に、これに関した学生の意見を紹介する。

例：EMI でのグループ活動における英語以外の言語使用

- **Chinese** is also commonly used as there are many students from mainland China or Taiwan, and this is especially the case when majority of the members in a group during group discussions are so. (EMIP34-U1-SG (eng) -Y_MY2,SG16)
- Mostly, **Chinese** and **Korean**. (EMIP35-U1-JP (jpn,tha) -Y_ZA7,TW2,TH6)

(Murata et al., 2019, pp.165-166)

このように EMI 授業の中でも、他言語の使用、特に参加者の L1 の使用は広く観察されており、これを完全に禁止しようとする試みは効果的でないだけでなく、教育的でないとも言える。この点では、トランス・ランゲージングの概念を教育に取り入れることを提唱する García and Li (2014)、Otheguy, García and Reid (2015) や Li (2016, 2018) と考えを共有できる。また、参加者全員が程度の差こそあれ、ある程度地域言語を第二共通語として共有、あるいは共有の過程、つまり学習中等、であれば、EMI 授業におけるある程度の母語コミュニケーション、あるいは地域言語の活用は、コミュニケーションをより効果的に成し遂げる助け及び効率的な内容理解に繋がる可能性もあり、これは先に述べた CBLT の立場と相反するものである。一方、同一母語に基づくグループ形成での共通言語によるディスカッションは、ELF による貴重な異文化コミュニケーションの機会を逃すという側面も考えられ、この点は多言語環境下での EMI プログラムの今後の課題とも言えよう (Murata et al., 2019; Doubleday, 2016 も参照のこと)。次項ではトランス・ランゲージングの現象と絡めて、この点を更に論じる。

3.3 EMI とトランス・ランゲージング及び多言語資源の活用

3.1 では、グローバル化との関連で推進される EMI の E、つまり英語は、ELF であるべきだという論を展開した。また 3.2 では 3.1 との関連で EMI における母語の役割、使用に関して論じた。この解釈で EMI の中に含まれる ELF コミュニケーションの根底には 1.4 でも指摘したように多言語主義があることを再確認する必要がある。このような多言語環境下での EMI によるコミュニケーションの特徴の一つに、最近特に注目されているトランス・ランゲージングがある (Cogo, 2016, 2018; García & Li, 2014; Hülbauer & Seidlhofer, 2013; Jenkins, 2015; Li, 2016, 2018; Murata 2019b; Seidlhofer, 2011 等参照)。以下、ここでは議論を進める前に、まず Li Wei (2018) によるトランス・ランゲージングの定義を紹介する。

‘Translanguaging’, --- ‘is a **transformative, resemiotization process**, whereby language users **display the best of their creativity and criticality**⁶⁾ --- , which conventional code-based approaches cannot address’ (Li, 2018, p.22)

「トランス・ランゲージングとは、言語使用者が、従来の言語に基づいたアプローチでは表すことができない独自の創造性や十分な情報に基づく判断を示す、意味の変換、再構築過程を言う」

(Li, 2018, p.22、村田訳、強調)

このトランス・ランゲージングの現象と解釈できる例を以下に挙げる。

(例) これは香港からの留学生が EMI による社会言語学の授業の発表で、韓国のアイドルグループが自分たちの宣伝のためにいかに英語を活用しているかを説明している場面である。

er the audience his fan treated it as very

cute huh a cute … *kawaii* moment

(other students laugh)

(EMI による社会言語学授業での 発表 36:35 (録音番号) , 2016

年 6 月 4 日録音) (Murata et al., 2019, pp.160-161 も参照のこと)

ここで、発表者は ‘cute’ を 2 度繰り返した後、更に *kawaii* を使用し、説明する。これは理解を助けるための、英語から日本語への単純な翻訳あるいは言い換えというよりも、もともと日本語である用語だが、現在は広くアジアの若者文化の中でそのまま使用されることが多い用語 (Toyoshima, 2015) を、同じ価値観を共有する多言語多文化背景の仲間の前で使ったという説明がより状況に即している。つまり、発表者は *kawaii* が日本語だから使ったというより (もちろんその要素も拭いさることはできないが)、よりこの状況、及び自身の独自の感覚、判断を的確に表す表現として使用した、つまり、トランス・ランゲージングを行っていると言えよう。

また、同じ EMI の授業では学生による自分たちの言語多様性の積極的な活用も観察された。これが、次の例に見られるトランス・ランゲージング⁷⁾である。これは、この学習共同体独自の連帯意識、アイデンティティー表明に使用されていると見られる (Cogo, 2009, 2012, 2018; House, 2016; Klimpfinger, 2009; Mauranen, 2014; Murata et al., 2019; Smit, 2010 も参照のこと)。以下は、EMI プログラム学部 1 年生セミナーで韓国からの留学生が英語を共通語として使いつつ、ほぼ全員がある程度共有する日本語も挿入しながら発表している例である。

(例) 1st Year Seminar (Presenter 12, an International (Korean) student)

・ P12: In 2003 冬のソナタ became popular. It is pure な romance. And ヨン様 boom was popular in Japan. 視聴率, which is prime time viewing, was quite high.

(Iino & Murata, 2016, p. 116 参照)

上記の例で、この韓国からの留学生は、例えば名詞だけではなく、一つの文中で自由に英語と日本語の間を行き来しており、構文上も「pure な romance」に見られるように、英語と日本語の合成をごく自然に行っており (Cogo, 2018; Li, 2018 参照)、広義のトランス・ランゲージングの例とみなすことができる。

これに対し、以下は、発表中の学生による相手を特定化（この場合、授業担当教員）したトランス・ランゲージングの例で、より狭義な分類では、その下部概念とみなすことができる、典型的なコードスイッチング例 (Cogo, 2018; Klimpfinger, 2009 参照) と言えよう⁸⁾。

(例) 発表で使用中の PC 操作に関する技術的質問の L1 によるやり取り

- 07 S09: --- and I was really interested in their
08 language background.
09 Sa: hm[mm
10 S09: [and I will (1.6) ((教授を見ながら))
11 → どうやって次行くんですか？
12 → T1: >うん うん<マウスです
13 → S09: ああ (1.0) uh I have I want to find out about methods >used ---

(EMI による社会言語学の授業での学生 (S09) 発表、2015 年 7 月 7 日録音)

(Murata et al., 2019, pp.161-162 も参照のこと)

上例では、発表担当の日本人学生が PC 操作という技術的問題で教授（日本人）の助言を得るにあたり、お互いの共通第一言語である日本語を活用している。発表言語、英語から、L1（日本語）を共有する教員だけに向けられた、相手を特化したコードスイッチング (Klimpfinger, 2009 ,p.359; Cogo, 2012, 2018 も参照のこと) で日本語を使用、上記 11 行から 13 行にかけての日本語でのやり取り自体、挿入句 (Insertion sequences, Schegloff, 1972) となり、技術問題解決後、S19 は 13 行目で「ああ」と理解を示し、PC を操作、問題解決の 1 秒後、ごく自然に ELF に戻り、10

行目で止まっていた発言を続け(13行目)、自然な形で発表を再開している(Murata et al., 2019; Mauranen, 2014 も参照のこと)。

以上、ここでは学生、教員共に多言語資源の有効活用を柔軟に行い、双方とも公式な EMI 方針に縛られることなく、状況に柔軟に対応、効果的なコミュニケーションへと繋げている例を提示した。このように多言語環境下で実施される ELF の視点を尊重した EMI では、コードスイッチングを含むトランス・ランゲージングが効果的に用いられ、地域言語や母語使用を厳密に禁止した EMI (English Only) 実施は現実的ではないことを明確にした。以下、この結果を踏まえて、英語(あるいはその他の言語—X)を媒介とした授業と母語・継承語・バイリンガル(多言語)教育の将来を考察する。

4. E (X) MI (英語 (or X 語) を媒介とした授業と母語・継承語・バイリンガル(多言語)教育の将来

E (X) MI の効果的な実施を、ここでは、特に、母語・継承語・バイリンガル(多言語)教育の理解及びトランス・ランゲージング等の多言語資源の効果的な活用(cf. Moore & Nikula, 2016 等参照)の2点から論じる。ここで大切な概念として、多様性、多言語資源活用、意味交渉、相互理解の4点を挙げる。つまり、ELF 的な視点、あるいは母語・継承語・バイリンガル(多言語)教育に理解を示す E (X) MI 教育は、学生、生徒がいろいろな言語背景の人々(多様性—即ち、バイリンガリズム・多言語主義の理解へと繋がる)と自分が持っている(多)言語資源を活用し(多言語資源活用—母語、継承語を含む)、意味交渉をしながら(意味交渉)、お互いの理解に至るような(相互理解)教育環境の提供をする必要がある(Murata & Iino, 2018; Seidlhofer, 2011; Widdowson, 2003 も参照のこと)。コミュニケーションの手段としてのトランス・ランゲージングはこの4つの概念と深く関わっている。つまり、トランス・ランゲージングができるということ自体が、その実践者または受け手が多様性を有し、許容し、また多言語資源を活用し、これを持って意味交渉を行い、相互理解に至るというプロセスを経ていると言える。このような要素の大切さは、筆者とその研究同僚が行った研究データでも、次のような回答に示されている。以下は EMI プログラムを受講した学生の回答である。

(例) EMI 受講学生の声 (アンケート結果)

みんな様々な国や地域から来ており、またこれまでの教育環境や育ってきた環境も様々なため、多様な英語に触れることができ、面白い。

(2016, Q5-EMI_P19-SILS-U4-JP (jpn) - 海外滞在 (Yes) - 学校 (Yes))

(Murata, 2019b; 村田他, 2018 も参照のこと)

この回答者は EMI プログラムで言語背景の異なる学生たちと学ぶことの意義、つまり、多様性、を高く評価している。また、次の回答者は筆者の WE&ELF という EMI の授業を 2017 年度に受講した学生の意見で、同じように、多様性への理解と認識を明示している。

WE によって色んな人が救われると思った。みんな違ってみんな良いんだな
と思った。(2017-#31)

(Murata, forthcoming)

この回答者は異なる変種の英語使用者の存在を通し、必ずしも母語話者の基準に合わせなくてもいいのだという認識に至り、これにより更に、自身がこれまでの学校教育の過程で皆と同じであることを直接的、間接的に求められていたことに気づき、「みんな違っていいんだ」という、言語を超えた新しい価値観、つまり、多様性の大切さまでを認識するに至ったことを示している。このように E (X) LF の視点を入れた E (X) MI 教育は他言語や他変種を排除するものではなく、使用者や学習者の中に多様性の重要性を育み、母語・継承語・バイリンガル教育を尊重する理念と相反するものではないことが明らかである。この結果は「母語・継承語・バイリンガル教育」の将来にも示唆を与えることと信ずる。

注

- 1) EMI/E としたのは I は instruction を表し、教える側の立場に立った用語であるのに対し、英語を媒介とする授業では、教える側だけではなく学生・生徒の立場からも多くの研究がなされ、また EMI 実施上でも後者の参加は大切である。よって EMI ではなく、EME (English-Medium Education) の方がより適切であると指摘されている (Smit, 2010 等参照)。本論文ではこの意見に賛成する一方、以下では、この意味を含みつつ、より広く定着している略語 EMI を使用する。
- 2) 後半は主として、多様性 (留学生等言語背景を異にする学生) 受け入れのための措置という面と、国内学生が英語を共通語として使用して専門科目を学ぶことにより、留学先等や将来のグローバルな環境での即時対応ができるような実践力育成の 2 つの要素のためであると言える。

- 3) この点に関しては Brut-Griffler (2002) の研究では、英語より地域の主言語が言語政策により推進され、その地域の少数言語消滅の危機に繋がることの方が多いと報告されている。
- 4) 継承語、少数言語維持の視点から言うと、もっと積極的な言語政策も合わせて取っていく必要があるが、ここでの論点は、ELF の視点を取り入れると英語は他言語を排除するもの (English Only) ではなく、多言語環境の中だからこそ、ELF のコミュニケーションが成り立つ、あるいは必要になることがある、という点である。
- 5) 但し、「最近では L2 学習や L2 を通しての専門科目学習における認知手段としての L1 の役割の研究も盛んになってきている」(Lyster, 2018:26、村田訳) ことも述べられている。
- 6) この criticality の用法はこれ自体、ELF 的な用法と言えるかもしれない。つまり、一般的に日本語で訳されている批判性であれば criticalness が使われるところ、ここでは criticalness の意味で criticality が使用されていることになる。Li Wei 氏によると (*personal communication* 2019 年 9 月) ここでの criticality は ‘informed assessment’ という意味で使用しているということであったので、この論文では、「十分な情報に基づく判断」と訳すことにした。いずれにしてもこの単語自体、ELF 的に creative で柔軟に使用されているという点で興味深い。
- 7) 本論文では、基本的にトランス・ランゲージングの概念がコードスイッチングの概念を排除するものではなく、広く多言語使用実践例の一つとしてこれを含むものと捉える (Cogo, 2018; Li, 2018 等参照)。そのため、Murata et al. (2019) では以下の例をコードスイッチング例として挙げているが、本論文では読者の混乱を避けるために、本例に関してはコードスイッチングの代わりに、トランス・ランゲージングという、より広義で上位概念を表す語を使用する。本論文でのコードスイッチングの定義は以下、注 8) を参照のこと。
- 8) Otheguy, García and Reid (2015) ではコードスイッチングは政治権力や社会的に分類され、名付けられた言語 (named languages) の存在を前提にしており (p.298)、そのような「言語」の存在を否定する彼らのトランス・ランゲージングの定義 (pp.282-3, 297) には相容れないとするが、この点において筆者は意見を異にするもので、大方においては彼らのトランス・ランゲージングの考え方に賛同するが、ELF のインタラクションで重要な要素を占めるコミュニケーション分析では政治社会的な立場に拘ることなく、より詳細なインタラクション分析を可能にする用語の使用が必要であると判断し、ここでは敢えてこの用語を使用する。また、Otheguy 他 (2015) ではコードスイッチングという用語自体が参加者の視座を取っていない (p.298) と述べているが、確かにこの範疇自体は研究者が分類に用いた etic な用語であるが、この例においては、発表者自身が話し相手を見極め、コードスイッチしたもので、これは会話分析的な emic な分析 (Sacks, Schegloff, & Jefferson, 1974) でも、本人の中で明らかに ‘named languages’ の意識があり意図的に相手を選んだ言語変換をしていると判断できる。もちろんこの意識が生成されるにあたってこの発表者の言語及びコミュニケーション力習得の過程で社会の影響があったことは否めないが、ここではその議論まで発展させる必要はないと判断する。また、筆者らの一連の研究の中でのインタビューで数名のインタビュー参加者自身が「コードスイッチ」という用語を用い、コミュニケーションの状況により、彼らがいかに表現を意図的に選ぶかが本人達 (参加者自身) の言葉で説明されており、この点でも、この用語の説明が参加者の視点に基づいたものでもあるとのサポートになる。

引用文献

- 官邸 (2012) グローバル人材育成戦略 (グローバル人材育成推進会議 審議まとめ)
<https://www.kantei.go.jp/jp/shingi/global/1206011matome.pdf> (2020 年 1 月 17 日閲覧)
- 津田幸男 (1990) 『英語支配の構造』 第三書館
- MEXT. (2011) 『『国際共通語としての英語力向上のための 5 つの提言と具体的施策』について』 文部科学省初等中等教育局国際教育課外国語教育推進室
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/082/houkoku/1308375.htm (2020 年 1 月 17 日閲覧)
- 村田久美子・飯野公一・小中原麻友 (2017) 「EMI (英語を媒介とする授業) における『共通語としての英語』の使用の現状把握と意識調査、および英語教育への提言」『早稲田教育評論』 31 (1), 21-38.
- 村田久美子・小中原麻友・飯野公一・豊島昇 (2018) 「EMI (英語を媒介とする授業) とビジネス現場における『共通語としての英語』への意識調査、および英語教育への提言」『早稲田教育評論』 32 (1), 55-75.
- 村田久美子・原田哲男 (2008) 「日本の応用言語学と言語教育におけるヘンリー・ウィドゥソン氏の貢献—コミュニケーション能力の解釈を中心に—」村田久美子・原田哲男編著『コミュニケーション能力育成再考—その理論と実践』 (pp. 15-26) ひつじ書房
- Azirah, H. (2009). Not plain sailing: Malaysia's language choice in policy and education. *AILA Review*, 22, 36-51.
- Björkman, B. (2016). English-medium instruction and English as the lingua franca in higher education in central and northern Europe. In M-L. Pitzl & R. Osimk-Teasdale (Eds.), *English as a lingua franca: Perspectives and prospects, Contributions in honour of Barbara Seidlhofer* (pp.57-68). Berlin: Mouton de Gruyter.
- Bolton, K., & Kuteeva, M. (2012). English as an academic language at a Swedish university: Parallel language use and the 'threat' of English. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 33 (5), 429-447.
- Brut-Grifflier, J. (2002). *World English: A study of its development*. Clevedon, UK: Multilingual Matters.
- Cheng, L. (2012). The power of English and the power of Asia: English as lingua franca and in bilingual and multilingual education. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 33 (4), 327-330.
- Cho, J. (2012). Campus in English or campus in shock? : Korean students hit hard by English-medium lectures. *English Today*, 28 (2), 18-25.
- Cogo, A. (2009). Accommodating difference in ELF conversations: A study of pragmatic strategies. In A. Mauranen, & E. Ranta (Eds.), *English as a lingua franca. Studies and findings* (pp. 254-273). Newcastle, UK: Cambridge Scholars Publishing.
- Cogo, A. (2012). ELF and super-diversity: A case study of ELF multilingual practices from a business context. *Journal of English as a Lingua Franca*, 1 (2), 287-313.
- Cogo, A. (2016). Conceptualizing ELF as a translanguaging phenomenon: Covert and overt resources in a transnational workplace. *Waseda Working Papers in ELF*, 5, 61-77.
- Cogo, A. (2018). ELF and multilingualism. In J. Jenkins, W. Baker, & M. Dewey (Eds.), *The Routledge handbook of English as a lingua franca* (pp. 357-368). Abingdon, Oxon: Routledge.

- Coleman, J. A. (2006) . English-medium teaching in European higher education. *Language Teaching*, 39 (1) , 1-14.
- Cook, G. (2010) . *Translation in language teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Cots, J. M., Lllurda, E., & Garrett, P. (2014) . Language policies and practices in the internationalisation of higher education on the European margins: An introduction. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 35 (4) , 311-317.
- Coyle, D., Hood, P., & Marsh, D. (2010) . *CLIL: Content and language integrated learning*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Crystal, D. (1997) . *English as a global language* (1st ed.) . Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Crystal, D. (2003) . *English as a global language* (2nd ed.) . Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Dafouz, E., Hüttner, J., & Smit, U. (2016) . University teachers' beliefs of language and content integration in English-medium education in multilingual university settings. In T. Nikula, E. Dafouz, P. Moore, & U. Smit (Eds.) , *Conceptualising integration in CLIL and multilingual education* (pp.123-143) . Bristol,UK: Multilingual Matters.
- Dafouz, E., & Smit, U. (2016) . Towards a dynamic conceptual framework for English-medium education in multilingual university settings. *Applied Linguistics*, 37 (3) , 397-415.
- Dearden, J. (2014) . *English as a medium of instruction—a growing global phenomenon: Phase 1*. London: The British Council.
- Doiz, A., Lasagabaster, D., & Sierra, J.M. (Eds.) . (2013) . *English-medium instruction at universities: Global challenges*. Bristol: Multilingual Matters.
- Doubleday, J. (2016) . *Lecturers' orientations to the multilingualism of international students in a British university*. Paper presented at the special colloquium: Linguistic diversity on the international campus at the 9th International ELF Conference, Universitat de Lleida , Catalonia, June 2016.
- Firth, A. (1996) . The discursive accomplishment of normality: On 'lingua franca' English and conversation analysis. *Journal of Pragmatics*, 26 (2) , 237-259.
- García, O., & Li, W. (2014) . *Translanguaging: Language, bilingualism and education*. Basingstoke, UK: Palgrave Macmillan.
- Gill, S. K. (2005) . Language policy in Malaysia: Reversing direction. *Language Policy*, 4 (3) , 241-260.
- Graddol, D. (1997) . *The future of English?: A guide to forecasting the popularity of the English language in the 21st century*. London: The British Council.
- Graddol, D. (2006) . *English next : Why global English may mean the end of 'English as a Foreign Language'*. London: The British Council.
- Harada, T. (2017) . Developing a content-based English as a foreign language program: Needs analysis and curriculum design at the university level. In M.A. Snow, & D.M. Brinton (Eds.) , *The content-based classroom: New perspectives on integrating language and content* (pp. 37-52) . Ann Arbor: The University of Michigan Press.
- House, J. (2003) . English as a lingua franca: A threat to multilingualism? *Journal of Sociolinguistics*, 7 (4) , 556-578.
- House, J. (2009) . *Translation*. Oxford: Oxford University Press.

- House, J. (2016) . Own language use in academic discourse in English as a lingua franca. In K. Murata (Ed.) , pp.59-69.
- Hu, G. (2009) . The craze for English-medium education in China: Driving forces and looming consequences. *English Today*, 25 (4) , 47-54.
- Hu, G., & McKay, S. L. (2012) . English language education in East Asia: Some recent developments. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 33 (4) , 345-362.
- Hülmbauer, C., & Seidlhofer, B. (2013) . English as a lingua franca in European multilingualism. In A-C. Berthoud, F. Grin, & G. Lüdi (Eds.) , *Exploring the dynamics of multilingualism* (pp.387-406) . Amsterdam, NL: John Benjamins Publishing Company.
- Iino, M., & Murata, K. (2016) . Dynamics of ELF communication in an English-medium academic context in Japan: From EFL learners to ELF users. In K. Murata (Ed.) , pp. 111-131.
- Jenkins, J. (2000) . *The phonology of English as an international language*. Oxford: Oxford University Press.
- Jenkins, J. (2007) . *English as a lingua franca: Attitude and identity*. Oxford: Oxford University Press.
- Jenkins, J. (2014) . *English as a lingua franca in the international university: The politics of academic English language policy*. Abingdon, Oxon: Routledge.
- Jenkins, J. (2015) . Repositioning English and multilingualism in English as a lingua franca. *Englishes in Practice*, 2 (3) , 49-85.
- Jenkins, J. (2017) . ELF and WE: Competing or complementing paradigms? In E. L. Low, & A. Pakir (Eds.) , *World Englishes: Rethinking paradigms* (pp.12-28) . London: Routledge.
- Jenkins, J. (2019) . The internationalization of higher education: But what about its lingua franca? In K. Murata (Ed.) , pp.15-31.
- Kirkpatrick, A. (2012) . English in ASEAN: Implications for regional multilingualism. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 33 (4) , 331-344.
- Klimpfinger, T. (2009) . “She’s mixing the two languages together” : Forms and functions of code-switching in English as a lingua franca. In A. Mauranen, & E. Ranta (Eds.) , *English as a lingua franca: Studies and findings* (pp. 348-371) . Newcastle, UK:Cambridge Scholars Publishing.
- Kuteeva, M. (2019) . Researching English-medium instruction at Swedish universities: Developments over the past decade. In K. Murata (Ed.) , pp.46-63.
- Li, W. (2016) . New Chinglish and the post-multilingualism challenge: Translanguaging ELF in China. *Journal of English as a Lingua Franca*, 5 (1) , 1-26.
- Li, W. (2018) . Translanguaging as a practical theory of language. *Applied Linguistics*, 39 (1) , 9-30.
- Lim, L. (2009) . Beyond fear and loathing in SG: The real mother tongues and language policies in multilingual Singapore. *AILA Review*, 22, 52-71.
- Ljosland, R. (2011) . English as an academic lingua franca: Language policies and multilingual practices in a Norwegian university. *Journal of Pragmatics*, 43 (4) , 991-1004.
- Low, E.L., & Pakir, A. (2018) . English in Singapore: Striking a new balance for future-readiness. *Asian Englishes*, 20 (1) , 41-53.
- Lyster, R. (2018) . *Content-based language teaching*. New York, USA: Routledge.
- Mauranen, A. (2006) . Signaling and preventing misunderstanding in English as lingua franca communication. *International Journal of the Sociology of Language* 177, 123-150.

- Mauranen, A. (2012). *Exploring ELF: Academic English shaped by non-native speakers*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Mauranen, A. (2014). Lingua franca discourse in academic contexts: Shaped by complexity. In J. Flowerdew (Ed.), *Discourse in context* (pp. 225-246). London: Bloomsbury Academic.
- MEXT. (2014). Press release 'Selection for the FY 2014 Top Global University Project'. Retrieved March 29, 2016 from http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/09/_icsFiles/afieldfile/2014/10/07/1352218_02.pdf
- Moore, P., & Nikula, T. (2016). Translanguaging in CLIL classrooms. In T. Nikula, E. Dafouz, P. Moore, & U. Smit (Eds.), *Conceptualising integration in CLIL and multilingual education* (pp. 211-233). Bristol, UK: Multilingual Matters.
- Murata, K. (Ed.). (2016). *Exploring ELF in Japanese academic and business contexts: Conceptualization, research and pedagogic implications*. Abingdon, Oxon: Routledge.
- Murata, K. (Ed.). (2019a). *English-medium instruction from an English as a lingua franca perspective: Exploring the higher education context*. Abingdon, Oxon: Routledge.
- Murata, K. (2019b). The realities of the use of English in the globalised world and the teaching of English: A discrepancy? *JACET Journal*, 63, 7-26.
- Murata, K. (forthcoming). Teaching WE and ELF in EMI from an ELF perspective: A case study at a university in the expanding circle. In Y. Bayyurt (Ed.), *World Englishes: Pedagogy*. London: Bloomsbury.
- Murata, K., & Iino, M. (2018). EMI in higher education: An ELF perspective. In J. Jenkins, W. Baker, & M. Dewey (Eds.), *The Routledge handbook of English as a lingua franca* (pp. 400-412). Abingdon, Oxon: Routledge.
- Murata, K., Iino, M., & Konakahara, M. (2019). Realities of EMI practices among multilingual students in a Japanese university. In J. Jenkins, & A. Mauranen (Eds.), *Linguistic diversity on the EMI campus* (pp. 149-171). Abingdon, Oxon: Routledge.
- Otheguy, R., García, O., & Reid, W. (2015). Clarifying translanguaging and deconstructing named languages: A perspective from linguistics. *Applied Linguistics Review*, 6 (3), 281-307.
- Park, J-K. (2009). 'English fever' in South Korea: Its history and symptoms. *English Today*, 25 (1), 50-57.
- Park, J-K. (2019). English-medium instruction in the Korean higher education context: From an English as a lingua franca perspective. In K. Murata (Ed.), pp.64-77.
- Phillipson, R. (1992). *Linguistic imperialism*. Oxford: Oxford University Press.
- Piller, I., & Cho, J. (2013). Neoliberalism as language policy. *Language in Society*, 42 (1), 23-44.
- Pitzl, M-L. (2018). Transient international groups (TIGs) : Exploring the group and development dimension of ELF. *Journal of English as a Lingua Franca*, 7 (1), 25- 58.
- Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50 (4), 696-735.
- Schegloff, E.A. (1972). Notes on a conversational practice: Formulating place. In D. Sudnow (Ed.), *Studies in social interaction* (pp. 75-119). New York, USA: Free Press.
- Seidlhofer, B. (2004). Research perspectives on teaching English as a lingua franca. *Annual Review of Applied Linguistics*, 24, 209-239.
- Seidlhofer, B. (2009). Common ground and different realities: World Englishes and English as a lingua franca, *World Englishes*, 28 (2), 236-245.

- Seidlhofer, B. (2010) . Lingua franca English: The European context. In A. Kirkpatrick (Ed.) , *The Routledge handbook of World Englishes* (pp. 355-371) . London: Routledge.
- Seidlhofer, B. (2011) . *Understanding English as a lingua franca*. Oxford: Oxford University Press.
- Seidlhofer, B. (2018) . English as a lingua franca: Why is it so controversial? *JACET International Convention Selected Papers*, 5, 2-24. Tokyo: JACET.
- Skutnabb-Kangas, T. (2001) . The globalization of (educational) language rights. *International Review of Education*, 47, 201-219.
- Smit, U. (2010) . *English as a lingua franca in higher education: A longitudinal study of classroom discourse*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Smit, U. (2016) . *Classroom discourse in EMI: On the dynamics of multilingual practices*. Special lecture delivered at the 1st EMI-ELF Workshop on 27 February 2016 at Waseda University, Tokyo.
- Smit, U. (2018) . Beyond monolingualism in higher education: A language policy account. In J. Jenkins, W. Baker, & M. Dewey (Eds.) , *The Routledge handbook of English as a lingua franca* (pp. 387-399) . Abingdon, Oxon: Routledge.
- Smit, U. (2019) . Classroom discourse in EMI: On the dynamics of multilingual practices. In K. Murata (Ed.) , pp.99-122.
- Smit, U., & Dafouz, E. (2012) . Integrating content and language in higher education: An introduction to English-medium policies, conceptual issues and research practices across Europe. *AILA Review*, 25, 1-12.
- Toyoshima, N. (2015) . *Kawaii* fashion in Thailand: The consumption of cuteness from Japan. *Journal of Asia-Pacific Studies*, 24, 189-210.
- Wang, Y. (2019) . The role of English in the internationalisation of Chinese higher education: A case study of English-Medium instruction in China. In K. Murata (Ed.) , pp.201-218.
- Widdowson, H. G. (1978) . *Teaching language as communication*. Oxford: Oxford University Press.
- Widdowson, H. G. (2003) . *Defining issues in English language teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Widdowson, H. G. (2008) . Foreword. In K. Murata, & T. Harada (Eds.) , *Applied linguistics and language teaching in Japan - A Widdowsonian perspective: Explorations into the notion of communicative capacity* (pp. 1-6) . Tokyo: Hitsuji Shobo. (村田久美子・原田哲男(編著)、『コミュニケーション能力育成再考』(pp. 1-6) ひつじ書房) .
- Widdowson, H. G. (2013) . ELF and EFL: What's the difference? Comments on Michael Swan. *Journal of English as a Lingua Franca*, 2 (1) , 187-193.
- Widdowson, H. G. (2015) . ELF and the pragmatics of language variation. *Journal of English as a Lingua Franca*, 4 (2) , 359-372.
- Widdowson, H. G. (2019) . TESOL: What does the acronym stand for? *JACET Journal*, 63, 1-6.